

十勝川水系自然再生検討会（第1回） 議事要旨

■日時：令和5年3月22日（水）13：00～15：00

■場所：帯広第2地方合同庁舎 3階共用会議室1～3

■出席者：中村委員長、赤坂委員、石原委員、卜部委員、大串委員、柿沼委員、根岸委員、森委員、柳川委員、山岡委員、渡邊委員（以上11名、泉委員は欠席）
※委員長以降の順は五十音順

■議題

- (1) 十勝川水系自然再生検討会について
- (2) 河川環境の変遷と課題について
- (3) 河川の利活用および地域連携の状況について
- (4) 自然再生の目指す姿について

■議事要旨

- ・十勝川水系自然再生検討会設置要領（案）が了承された。
- ・互選により、北海道大学中村教授が本検討会の委員長として選出された。

(1) 十勝川水系自然再生検討会について

十勝川水系再生検討会の概要について事務局から説明した。本検討会において自然再生基本計画策定を行い、具体的な取組内容は別途、個別の検討会を設けることについて了承された。

(2) 河川環境の変遷と課題について

十勝川水系における河川環境の変遷と課題について事務局から説明し、これに対し、委員から以下の発言があった。

- ・生息場の変遷について、出水や河川整備等の要因を分析していく必要がある。（委員）
→ご意見を踏まえ、次回以降の検討会で結果を提示したい。（事務局）
- ・生息場は自然に形成されたものか人工的なのかを整理する必要がある。（委員）
→ご意見を踏まえ、次回以降の検討会で結果を提示したい。（事務局）
- ・流域に関する変遷については、土地利用の変化を含めて整理が必要である。（委員）
→ご意見を踏まえ、次回以降の検討会で結果を提示する。（事務局）

(3) 河川の利活用および地域連携の状況について

十勝川水系における河川の利活用および地域連携の状況について事務局から説明し、こ

れに対し、委員から以下の発言があった。

- ・自然再生がツーリズムの1つのメニューになるよう期待する。(委員長)

- ・地域が不利益を被らず、観光資源や農作物の付加価値になるよう、この検討会で議論できればよい。(委員長)

- ・利活用の取り組み事例について、十勝は民間の活動が盛んな地域なので、議論促進のために各団体の活動内容の詳細を記載した方がよい。(委員)
→ご意見を踏まえ、加筆修正する。(事務局)

- ・十勝川水系は自然環境が観光資源として活用されている実績があり、ネイチャーツーリズム等への更なる活用が期待できる。(委員)

- ・タンチョウやハクチョウ等の飛来を活かしていくためには、飛来による農地や酪農への影響についての実態を踏まえて、地域とのあつれきを解消していく必要がある。(委員)

(4) 自然再生の目指す姿について

十勝川水系における自然再生の目指す姿について事務局から説明し、これに対し、委員から以下の発言があった。

- ・現在の制約条件の中で、どのようなことが出来るのかについて、この検討会で議論できればよい。(委員長)

- ・自然再生の目標設定が、なぜ昭和50年代なのか。河川改修が進んだ現状を考えると、様々な年代の中から昭和50年代を目標とすることは、ハードルが高いのではないかと考える。(委員)
→次回検討会で目標設定の議論を行いたい。(事務局)

- ・基本的な情報として、流域内の湿地等の情報について、河川の情報と合わせて整理することで、河川内で自然再生を実施する意義がみえてくると考える。(委員)
→ご意見を踏まえ、次回以降の検討会で結果を提示する。(事務局)

- ・事業メニューには、治水安全度の向上・維持についても記載し、事業により治水と環境がつながることを示した方がよい。(委員)
→ご意見を踏まえ、加筆修正する。(事務局)

- ・河川を改修以前に戻すのではなく、現状の河川で生物生息場を提供すると考えるとよ

い。流域を含め、どのような環境に戻すかを、今後議論できればよい。(委員)

(5) 全体を通して

- ・自然再生は将来に向かって行うものであるため、過去に戻すという考え方よりも、その機能に着目した再生の方法などを考えていく必要がある。(委員長)
- ・生態系ネットワークの観点から、流域全体を視野に入れた自然再生の推進を行う必要がある。(委員長)
- ・湿地整備による温室効果ガス削減量等を整理した方がよい。(委員長)
- ・自然再生事業に対する地域内外の関心を高めるために、ターゲットとなる種があると求心力が得られると考えられる。(委員長)
- ・議論の中で丹頂鶴の話もでていますが、十勝の住民にとって、十勝川のシンボルは「鮭」だと思う。地域に流れる河川に鮭がのぼってきていた時代も長く、住民には鮭が身近な存在である。今回の自然再生の議論の中で、「鮭」は重要なキーワードであると考えられる。(委員)
- ・自然再生のソフト整備、ハード整備ともに関りが深いサケ・マスは、シンボリックな種であると考えられる。十勝川水系は、自然産卵の場としてのポテンシャルは高く、自然産卵する野生のサケが加わることで、持続性の高いサケ資源づくりにつながると考えられる。(委員)
- ・温暖化の進行を踏まえ、自然再生の検討は水温も着目点となる。(委員)
- ・自然再生の取り組みの方向性において、ネイチャーポジティブといったキーワードを用いることで、環境の改善や回復を目指すことを示せると考える。(委員)